

# 霊宝館だより

題字・畚野光義師



高野山奥之院の一石五輪塔  
遺族は亡くなった方の遺骨と共に、その魂の依り代である五輪塔を携えて、浄土である高野山に納めました。

霊宝館だより 第122号

平成29年4月18日発行  
和歌山県伊都郡高野町高野山3006  
公益財団法人高野山文化財保存会  
高野山霊宝館  
電話0736-56-2029  
URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

開館時間	11月1日～4月30日 8時30分～17時00分 5月1日～10月31日 8時30分～17時30分
休館日	年末年始のみ
拝観料	大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円
専用駐車場あり	高野山に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

## 春期企画展

### 「霊場高野山 納骨信仰の世界」

4月15日(土)～7月9日(日)

#### 第122号 目次

春期企画展のご案内	2～3
収蔵品の紹介96	4
高野山の古建築第二十六回	5
高野山の考古学(十四)	6～7
古絵図で巡る高野山探訪(その四)	8～9
高野山の文書(十)	10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください



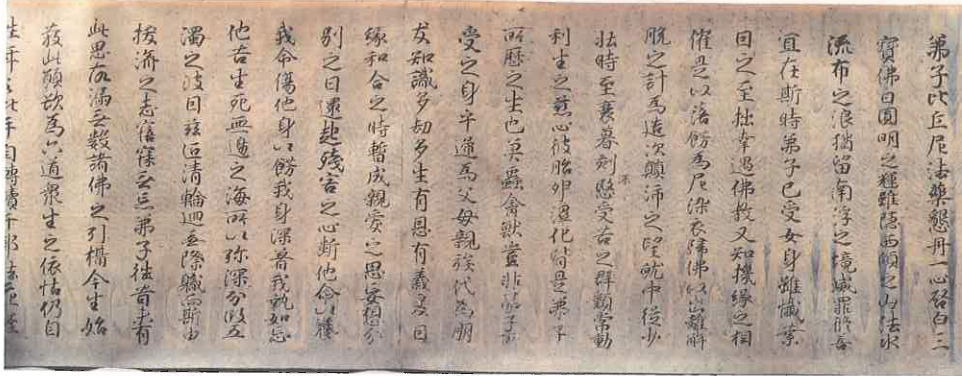
春期企画展

「霊場高野山―納骨信仰の世界―」

平成29年4月15日(土)～7月9日(日)まで

前期 平成29年4月15日(土)～5月28日(日)

後期 平成29年5月30日(火)～7月9日(日)



重文 比丘尼法葉願文 金剛峯寺



重文 比丘尼法葉種子曼荼羅 (金剛界・胎藏界) 金剛峯寺



重文 比丘尼法葉経塚陶製外容器蓋 金剛峯寺

高野山は、弘法大師空海により開創され、千二百年の歴史を有します。今回の企画展は、高野山の歴史でも重要な位置を占め、弘法大師信仰と関わりの深い納骨信仰に焦点を当て、関連する文化財、特に考古遺物から見た、知られざる高野山の過去から現在への変遷を辿ります。

主な展示品

考古

重文 高野山奥之院出土遺物 (比丘尼法葉経塚)

願文 供養目録 陶製外容器 鑄銅経筒

漆塗木製内容器 種字金剛界曼荼羅

種字胎藏界曼荼羅 般若心経・阿弥陀経

経帙 妙法蓮華経・観音経

重文 金銅宝篋印塔 (南保又二郎納骨遺品)

重文 奥之院出土遺物

金銅仏形納骨器 陶器小壺 金銅製納骨器

金銅蓮弁形納骨器 青磁四耳壺 青磁水注 青磁合子

陶器四耳壺 一石五輪塔 金剛峯寺

五輪塔 明王院

寺位牌 (雲形) 金剛峯寺

寺位牌 (札形・屋根形) 親王院

蓮華定院



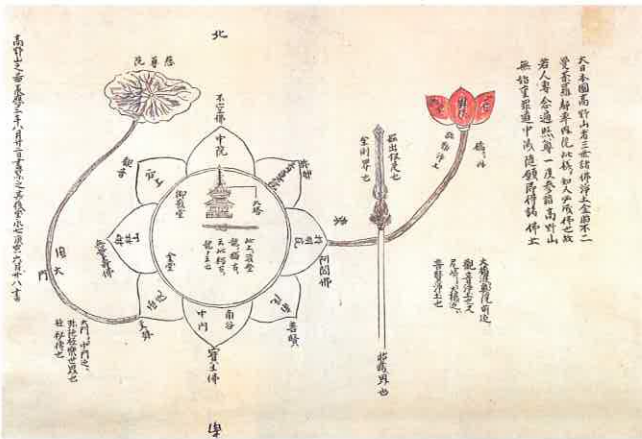
特別参考出陳 木製納骨五輪塔など 元興寺(奈良県)



重文 不動明王立像 金剛峯寺



重文 金銅宝篋印塔(南保又二郎納骨遺品) 金剛峯寺



高野山蓮華曼荼羅図 報恩院



重文 比丘尼法薬経筒 金剛峯寺

特別参考出陳

木製納骨五輪塔  
竹筒納骨器

元興寺(奈良県)  
元興寺(奈良県)

彫刻

重文 不動明王立像

金剛峯寺

絵画

重文 紅顔梨色阿弥陀像

桜池院

高野山絵図

西南院

高野山蓮華曼荼羅図

報恩院

高野山略図

報恩院

千体弘法大師像

金剛峯寺

阿弥陀聖衆来迎図(写本)

金剛峯寺

山越阿弥陀如来像

西禅院

弥勒下生变相図

五坊寂靜院

書跡

国宝 金銀字一切経(中尊寺経)のうち弥勒下生経

金剛峯寺

重文 決定往生集

宝寿院

同時開催

コーナー展示「地中から目覚めた祈りの形」

瓦器小塊(密教法具 六器・二器)  
 銅製椀・花壇(密教法具 六器・二器)  
 地鎮・鎮壇具(輪宝・楨・賢瓶・五宝・五香)  
 瓦塔(舍利塔)  
 礫石経(高野山町石経石)

など



収蔵品の紹介 96

重要文化財 高野山奥之院出土品のうち

比丘尼法薬経塚遺物 一括

(内訳は本文参照)

平安時代(十一〜十二世紀) 金剛峯寺蔵



漆塗木製内容器 総高31.0cm



銅製経筒 総高31.8cm



陶製外容器 総高36.2cm

昭和四十年(一九六五)の高野山開創一五〇年を迎えるにあたり、記念事業の一環として奥之院の整備が行われた際に、燈籠堂や御廟付近から数多くの遺物が発掘されました。それらは一括して「高野山奥之院出土品」として重要文化財に指定されています。今回紹介するのは、その中でも特に貴重とされるもので、昭和三十九年に見つかった、御廟の近くに埋められていた経筒とその内容品です。

経筒とは名前の通り、お経を納めた入れ物のことで、法華経八卷、無量義経、観普賢経(以上紺紙金字)、般若心経・阿弥陀経の合巻、供養目録(以上紺紙銀字)、腐食が進んだ法華経二卷、願文(以上紙本墨書)が経帙に巻かれて縦に入れて入られています。その底には絹に墨で描かれた金剛界・胎藏界種子曼荼羅と法華種子曼荼羅の三枚が畳んで敷かれています。なお種子曼荼羅とはほとけを梵字であらわしたものです。経筒は三重構造で、まず経巻と

曼荼羅は紙に包んで木製漆塗の容器に入れられ、次に天永四年(一一一三)の銘がある銅製の経筒に入れられて最後に永久二年(一一一四)の墨書銘のある陶製容器に入れられていました。願文や供養目録にも永久二年とあるので、経筒が埋納されたのはこの時期とみられます。願主の法薬という人物については、比丘尼つまり尼僧であること、財力のある身分の高い女性であること以外は不明です。金剛界種子曼荼羅の裏面に「永承七年(一一五二)歳次辰壬二月十六日辰壬時産女子」と墨書されているので、これが法薬の生年月日を指しているのかもしれませんが。当時の高野山は女人禁制なので法薬自身ではなく、代理人によって埋められたのでしょうが、弘法大師が入定し、遠い未来に弥勒菩薩が下生(この世にあらわれること)する場とされる奥之院に経巻を埋めた、彼女の信仰心の深さが、九〇〇年を経た現在において我々にも伝わってきます。

お経と共にさまざまな副納品を納める経塚の多くは十一〜十三世紀に築造されており、本品は十二世紀はじめの、制作年の明らかかなものとして重要です。

(福形安希子)

連載

高野山の古建築  
第二十六回 龍光院

鳴海 祥博



院内の全景 正面の門を入ると、左から台所、玄関、客殿が軒を並べ、右端に折れ曲がって本堂が建っている。高野山独特の堂舎の配置である。



龍光院の正面全景 通りから広い敷地を隔ててその奥に四脚門が建ち、左右に築地塀がめぐる。威厳と静寂に包まれている。



土室の間 部屋の中央にあるのが「土室」で、冬に暖をとるための囲炉裏である。左手障子の奥が「お大師さま入定の間」。ここにしかない特別な部屋である。



上段の間 灰色に見える壁面は「金唐革紙」という特殊な和紙が貼られている。欄間には院号の由来となった宝珠を戴いた勇壮な龍が彫刻されている。

院には、平安時代後期にこの中院に入った明算というお坊さん。ここにしかない特別な部屋である。お大師さまの徳を慕い登山した修行僧の住まいが起源となつています。ただ、ここ龍光院だけは別格です。何故ならここは「中院」と称されたお大師さまの住まいだったからです。高野山内で御大師さま以来、千二百年間ずっと法灯を守り続けている最も歴史のある寺が、ここ龍光院です。門の扁額にある「中院御房」とは、平安時代後期にこの中院に入った明算というお坊さん

の敬称です。明算は落雷で焼失した大塔を再建するなど、一時衰退していた高野山を復興し、また特に学徳に優れ、その教えは「中院流」と呼ばれ永く高野山教学の中心となりました。その明算が住持の時、庭の池から如意宝珠を捧げた龍が出現し、院内が照り輝くという不思議な出来事があったので、「龍光院」と名を改めたとされています。四脚門を入ると正面に左から台所、玄関、客殿が並び建ち、右端には折れ曲がりに本堂が建っています。このような建物の配置は、玄関と本堂が左右逆になる場合もありますが、山内の寺院に共通した特色あるものです。

龍光院の現在の建物は江戸時代末期の天保九年（一八三八）頃に再建されたものと思われまふ。客殿は玄関、中門、大広間、持仏の間、角の間、上段の間、土室の間などで構成され、これも高野山特有の形式となっています。上段の間の壁には一面に「金唐革紙」というとても珍しい和紙が貼られています。

※一般参拝は出来ません。

高野山内には総本山金剛峯寺を中心とする多くの寺院が並び並んでいます。今回からこれら山内の寺院を紹介しましょう。最初に紹介するのは龍光院です。壇上伽藍の北の通りに面した広い空地の先に四脚門が建ち、その左右には五本の筋の入った築地塀が巡ります。門の扁額には「弘法大師御住房」「中院御房龍光院」とあります。

お大師さまは亡くなったのではなく、悟りを得る「入定」という境地に入られたとされています。

江戸時代に書かれた『紀伊続風土記』という書物には、明算大徳が御大師さまに出会った「影向の間」という部屋がある、と記されていますが、おそらくこの「入定の間」のことなのでしょう。ここ龍光院にお参りする時、お大師さまをとて身近に感じることが出来るのです。



## 小仏塔の世界③

## 奥之院出土金銅製宝篋印塔(前編)

公益財団法人元興寺文化財研究所

狭川 真一

現在、重要文化財に指定されている奥之院出土の金銅製宝篋印塔は、明治末年頃に弘法大師御廟の北西部から、鑄出銅板阿弥陀三尊像(白鳳時代)一面とともに発見されたと言われています。現存する中世の宝篋

印塔では他に例を見ない、金銅製の優れた作品として早くから注目されています。今回はこの塔について、最近の研究成果を交えながら紹介します。



奥之院出土金銅製宝篋印塔全景(左側面)

## 宝篋印塔の外観

基礎から相輪上部までほぼ完全に残っているもので、高さは約二七センチあります。基礎は上部を三段の階段にし、側面には銘文が刻まれています。塔身は立方体に近く、円相を少し浮き出させています。そして、その中に輪郭を取り、線彫り(文字の輪郭をなぞるように彫る「籠彫り」)で金剛界四仏の梵字を刻み、隙間を魚々子で埋めています。笠は上に五段、下に二段の階段を設け、四隅には板状で三弧式の隅飾を立てており、三弧に合わせて縁取りをしていきます。笠上面に伏鉢と受花を置き、相輪は九輪の上に受花と宝珠をのせる一般的な形をしています。

基礎から相輪上部までほぼ完全に残っているもので、高さは約二七センチあります。基礎は上部を三段の階段にし、側面には銘文が刻まれています。塔身は立方体に近く、円相を少し浮き出させています。そして、その中に輪郭を取り、線彫り(文字の輪郭をなぞるように彫る「籠彫り」)で金剛界四仏の梵字を刻み、隙間を魚々子で埋めています。笠は上に五段、下に二段の階段を設け、四隅には板状で三弧式の隅飾を立てており、三弧に合わせて縁取りをしていきます。笠上面に伏鉢と受花を置き、相輪は九輪の上に受花と宝珠をのせる一般的な形をしています。

## 宝篋印塔の銘文

基礎の側面には銘文が刻まれています。銘文は四面すべてに刻まれている、全部で四〇字を一〇字ずつ均一に配分し、それぞれの面では二字ずつで改行して各面五行とし、それを藍で彫り込んでいます。その銘は、「大師／御入／定奥／院埋／土中」「安置／高野／山八／葉峰／上南」「保又／二郎／入道／遺骨／也弘」「安十／年六／月二／十二／日卒」(〳は改行)と読めます。内容は、概ね次のように解釈できます。

「弘安十年(一二八七)に死去した、南保又二郎の遺骨を高野山奥之院に





# 「古絵図で巡る高野山探訪」 (その四)

## 奥之院―参道

### 奥之院の古景観

伽藍を中心とした子院地区から弘法大師空海の御廟にいたるには、一之橋、中の橋、そして御廟橋を渡ります。これらのうち御廟と御廟橋付

近を描いた古絵図や絵画がいくつか存在します。高野山に伝わる『又統宝簡集』には江戸時代の写しの絵画が描かれ、その風景は高野山奥之院に五輪塔が出現する以前の鎌倉時代、十三世紀頃の様子を描いたものと考

えられます(図1)。御廟前の拜殿にあたる「燈籠堂」の位置は現在と共通します(図2)が、異なる点もいくつかあります。まず、御廟に向かって左側には「納骨堂」はなく、また向かって右側にも「経蔵」がありません。これらの建物の建立は、絵画の描かれた時期より後世で、納骨堂は十八世紀後半頃に建立(図3)、経蔵は慶長四年(一五九九)に石田三成によってその母の菩提を弔うために建立されたものです(図4)。

### 参道沿いの卒塔婆林

また、参道の周囲には、現在私たちがよく目にする大小様々な五輪塔などの供養塔も見当たりませんが、その代わり参道沿いには身の丈を優に上回る卒塔婆が林立しています。一見すると、現在の高野山奥之院の景観とあまりにも異なることから、高野山ではない別の場所を描いているのでは、また後世に想像力を膨らま

せて、昔の奥之院を描いているのでは、と考えてしまいます。現在、このような光景は、三重県伊勢市にある金剛證寺(十四世紀末以前は真言宗。現在は臨済宗南禅寺派)の奥之院の参道沿いの卒塔婆林の景観が非常に参考となります(図5)。

絵図に描かれた卒塔婆、また金剛證寺の参道沿いの卒塔婆は、いずれも亡くなった方への追善供養として建立されたものです。高野山の場合は、卒塔婆の建立とともに「納骨」を行ったものと考えられます。しかし、「納骨」といっても、必ずしも亡くなった方の「遺骨」とは限らず、「遺髪」「遺爪」「遺品」なども、広く「遺骨」として考え、奥之院な



図1 国宝『又統宝簡集』 金剛峯寺



図2 燈籠堂



図3 納骨堂



図4 重文 金剛峯寺奥院経蔵



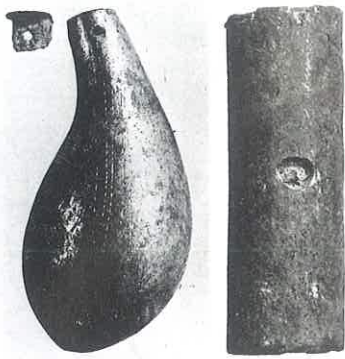


図7 重文 高野山奥之院出土品 青銅製連弁形納骨器 金剛峯寺



図6 重文 高野山奥之院出土品 青銅製納骨器 金剛峯寺



図5 金剛證寺奥之院参道の卒塔婆林 (三重県伊勢市)

どに納められました。また、その納めるところは、五輪塔などの石造物の中、またその地下の土中、さらには燈籠堂などの屋内に納められたと考えられます。  
現在、土中に納骨した明確な遺構は確認されていません。しかし、昭和四十年（一九六五）の高野山開創千百五十年記念大法会の記念事業として行われた燈籠堂の建設工事の際、出土品のいくつかの納骨器の中に、その形状から明らかに壁や柱などに打ち付けた釘穴などの痕跡が残されたものがあります。（図6・7）  
このような納骨器は、初期の燈籠堂



図9 『高野山略図』（御廟部分）高野山大学

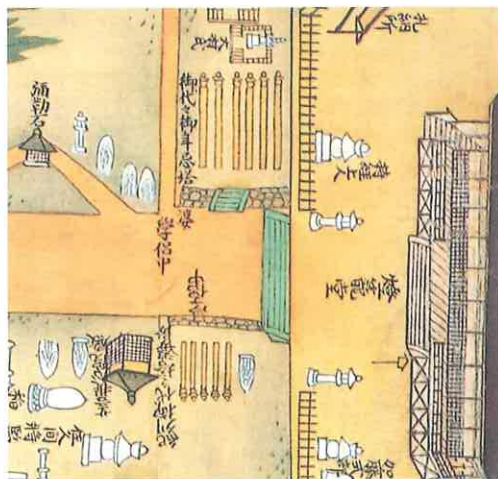


図10 『高野山奥院総絵図』（学侶塔婆部分）

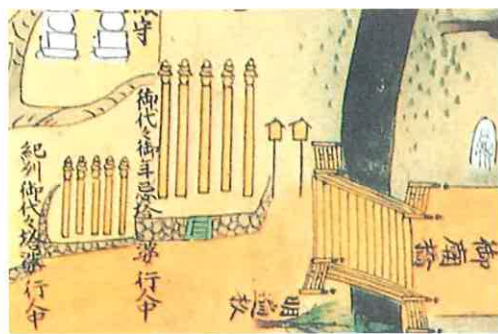


図11 『高野山奥院総絵図』（行人塔婆部分）

さて、先述の参道の卒塔婆に話は戻りますが、『高野山奥院総絵図』（寛政五年（一七九三）持明院 図8）

### 江戸時代の奥之院の景観

の内部に納められたものと考えられます。その後、御廟の側に納骨堂が建立されてから、納骨は「燈籠堂」から「納骨堂」にその役目が移り変わりました。



図8 『高野山奥院総絵図』持明院

堂下の階段までの両側には「紀州徳川家」御代々御年忌塔婆「学侶中」（図10）、御廟橋の手前には「紀州徳川家」御代々御年忌塔婆「行人中」（図11）と記されており、供養対象が同じ紀州徳川家の藩主らであっても、学侶と行人がそれぞれ供養し、卒塔婆を建立する場所が異なることが窺えます。江戸時代、高野山の子

院は学侶、行人、聖のいずれかに属していましたが、明治元年（一八六八）、この三派は廃止され、現在の金剛峯寺が本山として定められました。恐らく、時代は徳川時代から近代へと突き進む中で、徳川家の力が失われた結果、従来盛んに執り行ってきた年忌法会が営まれなくなり、参道沿いの卒塔婆が奥之院の景観から姿を消したのと考えられます。  
高野山の歴史は千二百年を有しますが、このように時代に即した出来事が多様な景観を生み、また失われたものもあります。古絵図や絵面からは、我々が知らない、様々な時代の高野山の景観を窺うことができ、悠久の時間旅行へ誘ってくれます。  
（鳥羽正剛）

や『高野山略図』（江戸時代 高野山大学 図9）などを見ると、『又統宝簡集』に描かれた絵画ほどの規模で林立していませんが、若干その景観が存在していたようです。  
また、前者の絵図（図8）の御廟橋から燈籠





# 高野山霊宝館からのご案内

## ◎春期企画展

「霊場高野山―納骨信仰の世界―」  
ミュージアムトーク  
展覧会の見どころを当館学芸員が解説しご案内します。

〔参加費〕 無料。ただし拝観料は有料。  
〔申込方法〕 事前申込は不要  
〔日 時〕

平成29年4月22日(土)、5月5日(金祝)、6月10日(土)、7月8日(土)  
いずれも午後1時30分から



重文 金銅宝篋印塔 (南保又二郎納骨遺品)

※拝観受付後、開始時間10分前に受付窓口前にお集まりください。  
※約1時間のご案内

## ◎夏期企画展

「(仮称) 正智院の名宝」

〔日時〕 7月9日(土)～10月9日(月祝)  
午前8時30分～午後5時30分  
(最終入館は午後5時まで)

〔主な出陳品〕

- 国宝 文館詞林 唐・平安時代
- 重文 不動明王坐像 平安時代
- 重文 毘沙門天立像 鎌倉時代
- 重文 八字文殊曼荼羅図 鎌倉時代
- 重文 紅玻璃阿弥陀像 鎌倉時代

重文 銅五鈷鈴

鎌倉時代  
以上、正智院

重文 八宗論大日如来像 鎌倉時代

善集院

(期間中展示替あり)



重文 紅玻璃阿弥陀像

## ◎第38回高野山大宝蔵展

「高野山の名宝」

〔日時〕 10月14日(土)～12月3日(日)  
10月  
午前8時30分～午後5時30分  
(最終入館は午後5時まで)

11月から12月

午前8時30分～午後5時  
(最終入館は午後4時30分まで)

〔出陳品〕 国宝・重文多数展示予定  
(期間中展示替あり)

## ◎宝物貸出情報

◎奈良国立博物館

特別展「快慶」

4月8日(土)～6月4日(日)

〔主な出陳品〕

- 重文 孔雀明王像 金剛峯寺
- 重文 四天王立像のうち広目天・多

開天

金剛峯寺

国宝 澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃

重文 深沙大将立像

金剛峯寺

平安時代 金剛峯寺

重文 執金剛神立像

金剛峯寺

国宝 金銀字一切経(中尊寺経)

以上、快慶作・鎌倉時代

平安時代 金剛峯寺

## ◎仙台市博物館

重文 金銅三鈷杵(飛行三鈷杵)

東日本大震災復興祈念特別展「空海と高野山の至宝」

平安時代 金剛峯寺

〔開催期間〕

重文 孔雀明王像(快慶作) 鎌倉時代

7月1日(土)～8月27日(日)

金剛峯寺

〔主な出陳品〕

ほか

7月1日(土)～8月27日(日)

〔主な出陳品〕

平安時代 金剛峯寺

国宝 響誓指帰 弘法大師筆 下巻

平安時代 金剛峯寺

国宝 諸尊仏龕 唐時代 金剛峯寺

7月15日(土)～9月3日(日)

国宝 八大童子立像のうち恵喜童子

〔主な出陳品〕

子・制多迦童子・清浄比丘童子

阿弥陀聖衆来迎図

子・恵光童子(以上、運慶作)

平安・鎌倉時代

指徳童子・阿耨達童子

有志八幡講十八箇院

鎌倉時代 金剛峯寺

ほか

## ◎霊宝館友の会会員の募集

拝観時に会員証を受付窓口でご提示いただくと、会員本人のほか同伴者3名様まで無料で入館できます。展示替えは年4回ありますので、博物館・美術館鑑賞がお好きな方には何度もご入館できますので大変お勧めです。

また霊宝館や高野山の文化財の情報掲載した機関紙「霊宝館だより」を年4回(予定)お届けいたします。

さらに、伽藍の御供所で会員証をご提示いただきますと金堂と大塔の内拝が無料となります。皆様のご入会をお待ちいたしております。

〔年会費〕

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

〔お問い合わせ先・申込先〕

高野山霊宝館 霊宝館友の会係 (電話0736-56-2029)

霊宝館の庭園

# ウワミズザクラ・上溝桜・ははか・波波迦

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ウワミズザクラはバラ科・サクラ属の落葉高木です。

高野山塊の山頂部では、そう苦労することなく、この樹を見(観)ることができます。

花期はヤマザクラやエドヒガンなどが葉桜となった頃、繚状花序、枝先の花軸に白い小花を穂状につけてこれが桜かな、と思わせるような容態をしています。

平成二十七年は、「大法会」の会



花と葉枝

期中の五月七日頃が山上では花の盛りでした。

地方によっては、花後の若い果実を果軸と果柄ごと塩に漬け山菜とします。

新潟県のもは特に有名です。魚沼市の「あんりんご」という商品になっているものを試食しました。字は杏仁子・杏仁香が当てられていることがありますが、アンズ(杏)の杏仁ではありません。あんりんごは、この地方の、この樹の方言名だそうです。

この樹の古名は波波迦。古くは、



幹と葉枝

「古事記」における天の岩屋戸騒動の解決策をさぐる占いに、この波波迦が用いられたと記されています。ウワミズザクラという和名の由来には諸説があります。

松田修著・「花の歳時記」にはウワミズという名は占溝の転訛で、鹿の肩骨(後世は亀の甲)に彫った溝を、この木で焚いて、その割れ目の形によって占うことから、と古事記の記載を基とする説が。手元の、たいていの書物には、この樹の材の上面(表皮となつているもの)に溝を彫り亀卜(占卜)に使ったことに

よるとして、上溝桜の字が当てられています。

高野山上で、水の流れる谷沿いやその近くの斜面に自生する、この樹に出会うたびに、「上水桜」ではと、勝手な思いも。

倉田悟著・「日本主

要樹木名方言集」に、ウワミズザクラの方言名の一つとして、みずざくら・和歌山(高野山)という記載はあるが、その由来は述べられておらず、みぞざくら(溝桜)の転訛か、水桜なのかは判りません。手元の他の書物にもこの樹の別称の一つとして、水桜が、あげられています。

その他の、ウワミズザクラの方言名の、極一部と、それらの命名の由来を。かまつか(鎌柄)なたつか(鉦柄)などは、この樹の材が強くしなやかであり各種の器具や道具の柄に用いられたことによる名。くそざくら(糞桜)・へこぎざくら(屁放桜)・よぐそざくら(夜糞桜)はこの樹の樹皮を削ったり、幹や枝を折った時の臭気による名。いぬざくらは、高野山にも自生する同科・同属のイヌザクラの混用。みずめは、これも高野山に自生するカバノキ科・カバノキ属のミズメ(別名・アズサ)の混用と思われる。